

アトミックアクシデント —放射能の発見から 福島第一原発事故まで—

ジェームズ・マハフィー 原著
百島祐貴 訳 林崎規託 監訳



本書は物語のように話が展開します。読み進めていくと、これは訳書でなく訳者が書いた本ではないかと錯覚します。翻訳調でなく、《です、ます》調の日本語の文章になっているからです。そして、訳者が原著の章に更に小さい章を入れ、読みやすく（＝息継ぎをしやすく）しているからです。これによって、ドラマの舞台ごとにシ

ナリオが編成されているように感じます。しかし、最大の要因は訳者の日本語としての表現力です。著者の思いをそのまま訳するのではなく、著者の思いをくみ取り、そこに訳者の思いを重ね、更に、日本の文化にそった表現をしているのです。なかでも、いくつかの章の日本語タイトルは圧巻としか言いようがありません。放射線に関係する言葉は訳者の専門ですが、その専門の厳密な技術用語よりは、日本人が分かる言葉を敢えて選んでいることにも親しみを感じるのです。

とは言うものの、科学・技術用語の英語と日本語表記の間にはどうしても埋めることができない乖離があります。例えば、“atom”と“nuclear”という2つの語句です。

“atom”から派生した“atomic”は、英語でさえも注釈が必要な言葉であり、“atomic”を原子（の大きな）力とする一方で、アトム（＝原子）のように小さい、あるいは、ミクロの反応（＝核反応）として使用することもあります。それを意識してか、訳書では、敢えて、『ア

トミック』として音の表記に止めています。

一方、“nuclear”は著者も述べているように、世間的には聞こえがよろしくありません。日本ではなおさらであり、nuclear powerは『原子力』であり、《核の力》とは言いません。日本語の対訳を使用する限り、この感覚の差はあまり埋まることはありません。“nuclear weapon”の対訳は『核兵器』ですが、“nuclear reactor”のそれは『原子炉』となり、同じ“nuclear”を論じている英語圏の文化と『核』と『原子』とを異なる言葉で論じる日本の文化の違いが如実になっています。このジレンマは著者も述べており、Atomic Energy Commission（AEC）やNational Reactor Testing Station（NRTS）にも“nuclear”の言葉はありません。核に関する研究も pile researchと言及されており、原子炉のひとつ fast breeder reactor（日本語はそのまま高速増殖炉）には、“nuclear”の欠片すらありません。科学・技術を政策的に論じるとき、この言葉の使い方が機微であることはどの国においても同じなのかもしれません。文化や感覚の違いを翻訳本で表現することはほとんど不可能かもしれません。それでも、訳者は読者に不明瞭と思われる内容には独自の注釈をつけ、できるだけ正確な内容を読者に伝えようと努力をしています。

原著のサブタイトルは《オザークの高原から福島へ》です。著者はオザークの高原（＝放射能を発見した場所）の絵の額縁がラジウムを含んでおり、そこからの放射線が人々の心を惑わせることを暗に示しています。本書は人間として当たり前の行動や心理に端を発し、ほんの些細な躓きや見逃しが事故や事象に繋がっていくという人の心を絡めた技術史です。額に入ったオザークの高原の絵についての序章は著者の“atomic”への思い入れととれます。それ以上の強い思い入れが訳者の言葉に見てとれます。秩序を重んじる日本で経験した福島原発の事故までの歴史を“高度の規律を身につけた”日本の放射線や原子力やアトミックの専門家がどう見るか、その点でも是非読んでいただきたい訳本だと思います。

（中村佳代子（前）原子力規制委員）

（ISBN 978-4-87163-475-5、電子書籍限定販売、紙の本の長さ 650 頁、本体 1,389 円（税別）、医学教育出版社、☎ 03-3454-1874、2017 年）

